

近世後期における薩摩藩の財政構造とその特質

福元啓介

——米収支をめぐって——

はじめに

戦前、諸藩の財政を分析した土屋喬雄氏は、薩摩藩財政の特徴を以下のように述べた¹⁾（傍線、括弧内は引用者による。以下同じ）。

特にこゝに注意しておきたいことは、この藩（薩摩藩）の財源が他の多くの藩のそれと異なり、米を最も主要なる財源とせずして種々の特産物及び貿易の利に、より大なる財源を有せることこれである。すなはち、産物料の額は年貢米の剰余の払代銀に数倍し、密貿易の利もあつたので、その財政収入の内容は他の諸侯のそれとは頗る選を異にしてゐたのである。（中略）実に此藩は、米の点においてはおよそ五、六の藩に劣るものであつたといへ、特産の多きことにおいても、亦貿易の利の大なりし点においても、諸侯に冠たるものであつた。しかもこの種の諸侯（中略）の代表者であつた。この点が実にこの藩の財政の特徴であり、又その強

みであつた。文政年末以後の大財政改革により、殆ど破産に瀕せる財政を立直し、幕末に於て他の諸侯の甚だしく窮乏せる間にあつて綽々たる余裕を示し、よく維新の際に軍事上、政事上の大活動²⁾を為すを得たのは、この特徴、この強みを有せし故にほかならないと思ふ。（後略）

米収入の脆弱さ、そして「特産物」の豊富さと利益の巨大さ、これが薩摩藩財政の特徴にして、財政改革を通じ幕末に「雄藩」たりえた理由である、とするものである。これは年貢米収入を基礎に、それらを畿内へ集中的に廻送・換金することで成り立つ典型的な幕藩領主財政のあり方とは大きく異なるものであり、薩摩藩財政には早くからその特異性が指摘されていたと言える。

その後の薩摩藩研究は土屋氏の指摘したような構造を基礎に、社会経済史的な分析が深められた。そこでは百姓のもとに剰余生産物を残さぬほどの強度の搾取、対する生産力の絶対的な低劣さが指摘され、同藩の財政窮乏の構造的要因とされた³⁾。このため藩財政は十八世紀半

ば以降の領内農村の荒廃と相まって砂糖を主とする南西諸島の特産品への依存、琉球貿易の拡大へと向かい、これらを強力に梃入れする天保期の財政改革が展開する、とするのが通説的な理解と言える。そしてこの財政改革は、「財政破綻の克服を「物成」の増収策によってではなく、殖産政策によって試み」るものと位置づけられた⁽³⁾。

しかし近年、農民層の一方的な下降分解しかうまない強度の搾取、それに対する生産物の絶対的な少なさを、農民的商品流通を生まなかったとするような諸点への問い直しが進められている⁽⁴⁾。その可否について本稿で言及する用意はないが、そうした研究動向を踏まえ、先行研究の示す同藩財政の理解についても再検討を加える必要がある。特に同藩財政の研究については、「西南雄藩」としての研究史の分厚さに比して意外なほど実態が不明瞭なまま議論が進められており、管見の限り、単年度収支の把握といった基礎的な部分の数量的考察すら十分になされているとは言い難い。「現在でも鹿児島県の歴史研究に際しては必ずそこから出発し、またそこへ戻らなければならない古典⁽⁵⁾」とされる『鹿児島県史』第二巻が比較的多くの史料を参照し掲出しているほか、上原兼善氏の研究⁽⁶⁾が天保期の米・貨幣収支を大坂も視野に入れる形で具体的に検討しているが、ほかにまとまった研究は見られない。長く前提とされてきた同藩財政の「特徴、強み」がどのような実態を持つものであったのか、基礎的な点から検討しなおす必要がある。そこで本稿では、改めて藩財政の基礎となる米収支を中心に分析を行う。薩摩藩の米収入の脆弱さについて、量的な問題だけでなくその質、つまり米の種類・品質の面から薩摩藩の年貢米収入の実態を指摘する。ついで、「大なる財源」のいっぽうとされた「特産物」との間、にどのような関係があったのかについても検討し、薩摩藩財政の基礎

的な構造を明らかにする作業のひとつとする。ここでは、薩摩藩財政を規定した、同藩に特徴的な要素として南西諸島経営に必要とされた米支出・「統米」を中心に検討したい。

なお、第二章以降で主に使用する史料は、東京大学史料編纂所蔵の「島津家本」に含まれる諸帳簿類である。「島津家本」は「明治から昭和初期にかけて、旧鹿児島藩主島津家の家史編纂・史料蒐集機関として存在した「公爵島津家編輯所」が、その編纂事業の過程において蒐集・作成し、第二次世界大戦後東京大学史料編纂所の所蔵となった書籍の総称⁽⁷⁾」とされる。本稿で使用するのはいずれも竖帳の形にまとめられており、帳末の「台本・出処・種別・数量」欄はいずれも「本邸所蔵御手許書類ノ内原本一冊」となっている。編輯所によって蒐集され、主に大正期に謄写された複製であるため明確な翻刻の誤りなどがみられる箇所も存在するが、極めて重要なものであるため、本稿では適宜内容について批判を加えつつ利用したい。

第一章 年貢収納機構と収納米

第一節 高構成と蔵入地

まず、薩摩藩の基本的な支配構造および藩領の高構成について、主に先行研究に依拠しながら述べておく。特に註記のない場合は『鹿児島県史』第二巻に依る。

薩摩藩領は薩摩国・大隅国の一円および日向国の一部にわたり、さらに琉球へと連なる南西諸島にまで及ぶ。藩領は一部の島嶼を除いて基本的に外城（郷）と呼ばれる行政区画に区分されており、外城制度

と呼ばれる支配組織が敷かれていた。⁽⁸⁾ その数は百数十ヶ郷にわたり、内部に家臣団の所領である給地を含みながら藩直轄の蔵入地が展開していた。

同藩は、過大な武士人口⁽⁹⁾を抱えるがゆえ地方知行を維持し続けた点に特徴があり、諸郷の支配のあり方にもそれが反映されている。諸郷は空間的には小城下ともいふべき郷士集落Ⅱ麓、町人地の野町、百姓集落の在、港湾に設置された浦浜から構成される。郷士は「〇〇衆中」「〇〇士」としてそれぞれの郷に所属し、郷を支配する地頭の統制下にあった。対する鹿児島城下の武士は鹿児島士（城下士）とされ、郷士との間に厳然たる身分差を有したが、城下士内にもそれぞれ家格が設定され、その差は大きかった。

次に、「表一」および「表二」から藩領の高構成の推移を確認する。「表一」は藩の内高を薩摩国・大隅国・日向国諸県郡・道之島（奄美諸島）・琉球の区別を設けて示したもので、「表二」は蔵入地・給地、そして給地内の鹿児島高（城下士所有高）・所高（郷士所有高）を区別し示したものである。

薩摩藩が石高制下に編入されたのは豊臣秀吉の支配下に入つてのちとなるが、秀吉政権からの軍役に対応すべく蔵入地の増強が図られ、文禄三・四年には検地が行われた。徳川政権下でも朱印高は文禄検地高を引き継ぎ、これを修正する領内総検地（内検）において朱印高の維持が目指され、石盛の操作へとつながった。

内検は四度にわたって実施されたが、慶長十六・十七年の慶長内検では高一石Ⅱ粗・大豆一石五升とし、寛永十二・十三年の寛永内検では高一石Ⅱ粗大豆九斗六升に換算し高を打ち出した。後者において実収は五分摺りにして玄米四斗八升という計算になる。寛永内検以降、

表一 薩摩藩内高

	薩摩国	大隅国	日向国 諸県郡	三州合計	道之島	琉球	琉球・道 之島合計	合計
	石	石	石	石	石	石	石	石
文禄4				608,726				
慶長内検	256,980	201,311	160,763	619,055		89,086	113,501	732,157
寛永16	269,061	198,903	108,224	576,189	32,828	90,883	123,712	699,855
万治内検	270,223	203,463	135,692	609,378	46,937	〃	137,821	747,193
寛文7	272,366	214,533	134,071	620,971	〃	〃	〃	
享保内検	308,292	255,085	157,661	721,040	51,756	94,230	145,987	867,027
天明3	308,763	259,345	152,932	〃	〃	〃	〃	867,028
文政9	328,564	266,534	158,584	753,683	〃	〃	〃	899,671
弘化4 ～嘉永2				742,185	52,574	〃	146,805	888,990

『鹿児島県史』第2巻65頁より作成。数字は誤りも含むが、大勢に影響を与えるものではないので元のままとした。

表二 薩摩藩内高における蔵入高・給地高構成

	内高	蔵入高	給地高	給地率	鹿児島高【A】	所高【B】	【A】：【B】
慶長内検	732157 石	石	414633 石	57%			
寛永9			476226 石		306528 石	86654 石	3.5：1
〃	699855 石	195671 石	490009 石	70%			
慶安元		199170 石	483871 石		310440 石	88601 石	3.5：1
慶安5	696321 石						
万治内検	747193 石						
寛文7	758792 石						
延宝4			503673 石		331540 石	81250 石	4.0：1
元禄12			504158 石				
享保内検	867027 石	334000 石	526839 石	61%	317476 石	96839 石	3.3：1
元文元	872886 石	348921 石					
〃6			561912 石		221849 石	99844 石	2.2：1
明和8			550967 石		340127 石	112197 石	3.0：1
天明3	867028 石						
寛政7		383000 石					
文政9	899671 石	340000 石	568160 石	63%	341607 石	116912 石	2.9：1
弘化4							
～嘉永2	888990 石	322391 石	566598 石	64%	318556 石	120974 石	2.6：1

上原兼善「薩摩藩における軍制改革」318頁第1表、および原口泉「薩摩藩軍事力の基本的性格」57頁表1をもとに作成。

薩摩藩はこの一石＝粃大豆九斗六升を引き継いで行くが、このような操作による表高との乖離にそもそも財政窮乏の一因があった。寛永内検は家臣団へ軍役を設定する「ならし検地」、その後の万治内検は役屋基準の引下げによる百姓への負担強化を目的としたとされるが、享保七年から十一年にかけて行われた享保内検をもって領内総検地は終了し、以後幕末まで行われることはない¹¹⁾。この検地で薩摩藩の農村支配はいちおう完成とされ、強制的な人移し（人配）によって労働力の不足した地域に適正な労働力配置が行われた。

以上を踏まえ「表一」三州合計高を見ると、寛永内検を最低にその後漸増、享保内検で内高は七〇万石超という状況を確認できる。いっぽう「表二」からは蔵入地に対する給地の優越、給地内における鹿児島高の優越を指摘できる。時期によって差はあるが、給地高は全体のおよそ六割、その内部で鹿児島高は所高におよそ三倍する。近世中期以降、蔵入高はおよそ三〇万石程度であった。しかしいずれも粃高表示であり、藩の年貢米収入が脆弱であるとする根拠のひとつとなる。

蔵入地と給地との関係を見ると、蔵入地よりの収納高は「御蔵米トハ、草高三拾余石ノ納額ニシテ、現米凡ソ八万石余ヲ云フ」という¹²⁾もので、後に見るように収納米は十万石内外に過ぎなかった。このため藩の財政難は近世初期より顕在化しており、家臣団・寺社領の大幅な土地は比較的早い段階で実施されている。

しかしながらそうした措置では補いきれず、膨大な給地高（それを有する家臣団）への負担転嫁が実施された。出物・出米（出銀）と称するものがそれで、近世初期より財政難を理由に、その補填を名目として家臣団に賦課がなされている。これは給地高一石にたいして一定の割合で賦課されるもので、代銀納が許される場合もあった。宝永年

間には石別八升一合を定式とすることになったが、その後も財政状況によって変化がみられた。この出来に加え、さらに財政状態にに応じて課されるのが重出来である。これは三升から五升を基本とし、いずれも臨時の徴収を名目としていたが、次第に賦課は常態化する。徴収も藩の収納機構を通じて直接・厳密になされるようになり、家臣団にとつては大きな負担となつていった。⁽¹⁵⁾

第二節 年貢収納機構

次に、蔵入地からの年貢米収納について、収納機構に着目し詳しく検討する。

薩摩藩が外城制度とよばれる支配体制を敷いていたことはすでに述べた。領内は百十数か所の郷に分けられたが、各郷の蔵入地からの年貢の収納にあたるのが下代という役人であり、⁽¹⁶⁾ 収納先の蔵は下代蔵と呼ばれる。⁽¹⁷⁾ 各村は近隣の下代蔵を年貢の納入先とし、その下代蔵の名を冠した「与（組）」に組織されていた。⁽¹⁸⁾ この下代および下代蔵、組に関する先行研究は少ない。薩摩藩の財政を基礎から支えているこれらの収納機構について分析する必要がある。

次頁以降の「表三」は、下代蔵の組分けとそこでの収納年貢量について「諸組免本給地高出来諸郷蔵々軒数取調帳」⁽¹⁹⁾ をもとに作成した。まず、本史料の記載の一例を示す。

「史料二」「諸組免本給地高出来諸郷蔵々軒数取調帳」

D	国分組		A
	下井	国分小村之内	
D	国分組		B
	下井	国分小村之内	
D	国分組		C
	下井	国分小村之内	

- 一、真米千三百六拾九石六斗貳合
一、赤米三百八拾三石九斗四升七合

- 一、真米九石六斗七升五合
組模合三合米引付本

- 一、五敷四間茅葺蔵三軒

- 一、四敷三間右同壹軒

E 右式行御蔵付郷分致造立、御修甫方二付而茂御蔵付郷百姓分年々御修甫相勤申候

御蔵付

F

川内村

上井村

下井村

敷根

記載内容は、(A) 組名、(B) 収納先の下代蔵による区分、(C) 下代蔵の所在地、(D) その下代蔵の年貢収納量、(E) 蔵の規模・営繕状況、(F) 所属する「蔵付」と表現される郷名・村名となっている。Cについては複数の場合もあり、その際は「本蔵」「中取蔵」の区別がなされている。⁽²⁰⁾ 「表三」では本蔵を太字とした。Dについては真米・赤米の区別があることが本史料の特色をなしている。また、併記されている模合三合米とは、一石あたり三合の割合で徴収されたもので、種々の百姓夫立を免除する代わりに納めさせたものであった。⁽²¹⁾ (E) については今回「表三」に反映していないが、多くの場合修繕は蔵付郷の百姓負担で、例外的に「囲米蔵」とされている場合は「御物構」、即ち藩費による修繕とされていた。最後に(F)で蔵付の郷、村が列挙されるが、「史料二」であれば国分郷のうち川内・上井・下井の三ヶ村と、敷根郷内の全ての村が「国分組下井」の蔵付であることを示している。

こうした記載が三十三組ぶん書上げられ、領内の百数十ヶ郷をすべてカバーしている（私領は除く）。本史料は少なくとも天保十四年

表三 下代蔵組分

【A】		【F】		【D】			【C】					
組名		蔵付郷	蔵付村	真米（石）	赤米（石）	模合三合米 （真米、石）	蔵所在地					
内場	鹿児島組	鹿児島諸在	—	1087.634	502.743	—	—					
	小野組	（近在）	小野、原良、永吉、下田、吉野	435.065	204.147	—	—					
	谷山組		—	653.806	556.422	12.752	（谷山）上福元村					
	穎娃組	川尻	拾町、仙田、郡	403.859	21.619	—	（穎娃）拾町村					
		石垣	牧之内、御領、別府	683.354	132.069	—	（穎娃）御領村					
	山川組	渡	—	808.05	448.668	21.878	（指宿）拾弐町村					
		島川	山川	372.648	201.436	—	（山川）成川村					
	蒲生組	小島	蒲生	久末、上久徳	1131.953	729.088	4.477	（帖佐）西餅田村				
			帖佐	西餅田								
			山田	大山								
納屋町		蒲生	漆、白男、西浦、北村、米丸	1975.042	546.298	12.636	（帖佐）鍋倉村					
		帖佐	三拾町、鍋倉、長瀬、住吉、寺師、豊留、深水、木津志、上名、下名、辺川									
真幸組		溝辺	—	4484.599	461.542	46.421	（加治木）木田村之洲崎、（栗野）北方村					
		吉田	—									
		加久藤	—									
		栗野	—									
		横川	—									
		飯野	—									
		馬関田	—									
		吉松	—									
		新孝	国分					小田、小濱、野久見田、内、新孝、住吉、見次	1336.579	376.449	7.904	（国分）新孝村
			高原					三浦牟田				
日当山	—											
下井	川内、上井、下井											
国分組	国分	敷根	1369.602	383.947	9.675	（国分）小村						

	小村	国分	府中、野口、上小川、福島、松木、小、向花	1530.041	333.798	14.244	(国分) 住吉村
	小村	国分	新町	1089.371	276.437	16.744	(国分) 住吉村
		曾於郡	—				
		踊	—				
		清水	—				
		財部	—				
	福山組	恒吉	—	2238.705	368.867	36.648	(福山) 福山村、(牛根) 二川村
		福山	—				
		勝岡	—				
		市成	—				
		百引	—				
		牛根	—				
		末吉	中之内、五拾町、諏訪方、深川、諏訪原、岩崎、二之方				
	大始良組	鹿屋	上名、中名、下名	1828.504	948.539	20.277	(花岡) 木谷村
		大始良	麓、柳子目、横山、浜田	2085.763	195.241	7.521	(大根占) 馬場村・神之川村之内鳥浜
		大根占	—				
	根占組	田代	—				
		小根占	—	1828.391	147.636	—	(小根占) 川北村
	高須組	佐多	—	884.332	55.312	—	(佐多) 伊佐敷村・浜尻村・辺塚村
		高隈	上高隈	1789.131	915.544	12.451	(鹿屋) 高須村
		始良	麓				
		鹿屋	南高須、北高須				
		高山	富山、前田、後田、野崎、宮下				
		高隈	下高隈				
	高須組	高山	新留	1588.095	835.161	11.197	(鹿屋) 高須村
		始良	上名、下名				
		坊泊	—				
		久志秋目	—				
	大浦	鹿籠	—	917.118	292.358	0.856	(加世田) 大浦村・片浦村之内小浦、(久志秋目) 久志秋目村、(坊泊) 泊村
		加世田	大浦、津貫、赤生木、片浦				
西目 外場	加世田組						

	小松原	加世田	益山、川端、別府田間、小湊、宮原、村原、武田、内山田、唐仁原、地頭所	835.239	468.303	—	(加世田) 小湊村
		川辺					
		山田(川辺郡)	—				
伊集院組	清藤	伊集院	—	704.702	546.635	1.215	(伊集院) 清藤村、(市来) 港村
		市来	—				
		串木野	—	1118.799	1012.316	—	(串木野) 下名村・羽島村
伊作組	高橋	阿多	—	1153.579	779.314	6.93	(田布施) 高橋村
		田布施	—	437.654	333.462	6.872	(伊作) 入来村
		伊作	—	1299.1	615.861	7.491	(東郷) 田海村
隈之城組	向田	東郷	—				
		中郷	—				
		隈之城	—				
		山田(薩摩郡)	—	804.394	1139.563	11.418	(隈之城) 東手村之内向田・宮里村
		百次	—				
川内組	高江	樋脇	市比野				
		高江	—	930.386	559.875	10.807	(高江) 高江村、(水引) 五代村
		水引	五代、大小路、宮内				
山崎組	西方	高城(高城郡)	—	1101.296	459.406	7.455	(高城) 西方村・麦之浦村、(水引) 草道村
		水引	網津、草道				
		山崎	—	880.418	575.668	20.335	(山崎) 山崎村
菱刈組	大口手	樋脇	塔之原、倉野、大村、黒木				
		大口	—	4181.197	712.228	36.312	(羽月) 宮人村之内下之木場、(隈之城) 東手村之内向田
		山野	—				
		羽月	—				
		湯之尾	—				
本城手	本城手	馬越	—	3346.943	728.58	14.312	(羽月) 宮人村之内下之木場、(隈之城) 東手村之内向田
		本城	—				
		曾木	里				
祁答院組	祁答院組	曾木	—	2120.523	878.109	—	(宮之城) 屋地村
		曾木	永野				

	波留	阿久根	波留、山下、鶴川、赤瀬川、大河、西目	1522.014	417.106	5.997	(阿久根) 波留
阿久根組	脇本	阿久根	多田、折口 — 西目、江内	1425.728	1199.576	8.75	(出水) 西目村
		野田					
		出水					
	出水組	出水	上大河内、下大河内、六月田、上鯖 瀬、下鯖瀬、武元、上知識、下知識、 庄、高尾野	4278.079	939.916	21.6	(出水) 下知識村
	長嶋	長嶋	—	686.809	221.37	2.645	(長嶋) 山門野村・浦底村
内之浦組	上飯島組	上飯島	—	202.129	174.149	3.316	(上飯島) 中飯村
	内之浦	内之浦	—	1144.973	400.981	4.058	(内之浦) 南方村・岸良村
		志布志	—				
		松山	—	622.802	197.585	48.648	(志布志) 帖村
	志布志組	末吉	南之郷、五拾町				
東目 外場	肝付	岩弘	池之原、細山田、有里、岩弘	669.546	612.727	9.056	(串良) 岩弘村
		柏原	川東、波見、大崎	513.837	661.605	12.903	(串良) 川東村
	高山組	串良	岡崎、川西、新川西、上小原、下小原	962.069	1519.792	21.496	(串良) 新川西村
		高崎	—	1147.138	453.06	4.736	(曾於郡) 大窪村
		高原	広原、後川内				
関外	大久保	野尻	—				
		須木	—	1174.805	229.77	36.602	(高岡) 浦之名村
		小林	—				
	浦之名	高岡	浦之名				
		高岡	内山、花見、飯田、五町、高浜	840.049	471.774	22.888	(高岡) 花見村
		高岡	南俣				
	綾組	南関方	入野	1012.137	318.587	12.277	(高岡) 入野村
		綾	北俣				
		八代関方	八代南俣、八代北俣	1107.468	175.376	14.592	(高岡) 八代水俣村・入野村
	深年組	中本	—	1061.833	528.19	10.844	(倉岡) 糸原村、(穆佐) 下倉永村
		穆佐	—				
		深年	向高、深年、田尻	1092.014	276.748	12.834	(高岡) 深年村・田尻村
	高城組	高岡	水流、大牟田	3064.57	414.405	13.865	(末吉) 深川村
		高城	—				

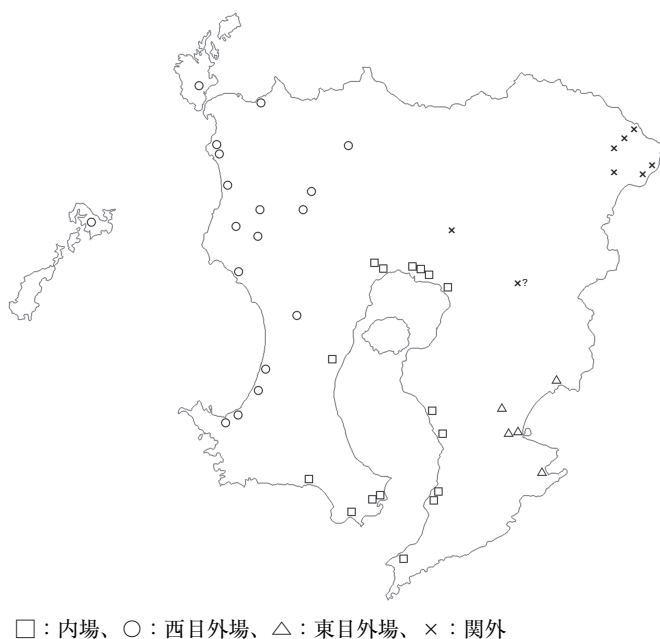
「諸組免本給地高出来諸郷藏々軒数取調帳」(東京大学史料編纂所蔵)をもとに作成。

(一八四三) 以降の内容を持つと推測され、藩の天保改革の影響が反映されていることが想定されるが、近世後期の薩摩藩における蔵入地からの年貢収納の全容を示すものとして重要である。

組分について言及のある『鹿児島県史』によると、各郷を分かつ十三の組は内場・西目外場・東目外場・関外という四つに区分されていたとされる。²³⁾「表三」はそれに従い、内場・西目外場・東目外場・関外へと分類し組分を示している。また「図一」はその区分に従い、史料に記載されたそれぞれの組の下代蔵の所在地を示した。これを見ると、鹿児島湾沿岸を内場、それ以外郷を薩摩半島では西目外場、大隅半島では東目外場、日向諸郷を関外としていたことが看取される。高城組のみ『県史』に記載がないため判別不能だが、蔵付の高城郷・高原郷はいずれも日向国であるが大隅国との境に近く、蔵付先の下代蔵は大隅国末吉郷内に所在している。関外に区分される赤谷組大久保も類似した蔵付郷と下代蔵の位置関係となっており(組分けの上では)高城組も関外に含まれる可能性もある。しかし実際には大隅方面へ年貢米は輸送されたものと考えられよう。『県史』は組内の構成、つまりどの郷がどの組に属しているかまでは述べていないので、本史料より判明する郷レベル・それ以下での組編成について、以下に詳しく「表三」から確認する。

「史料一」および「表三」からまず指摘できることは、多くの組では組内で収納先の蔵によってさらなる区分が存在していること、そして郷全体が一つの同じ組・蔵に所属(蔵付)となるわけではなく、村ごとに異なる組へ蔵付となっている例が少なくないことである。そのような場合、「表三」では「所属村」の欄に個別の村名を示している。例えば「史料一」にも示した国分組を「表三」で見ると、組内は

図一 下代蔵所在地



さらに新孝・下井・小村の三つに区分されており、国分郷内の村々は同じ組内でそれぞれ異なる下代蔵を収納先としている。また、国分組小村とその下の福山組小村のように、異なる組であっても同一の蔵の蔵付とされているところもある。

右の点について、絵図史料から確認する。ここでは、「表三」中の内場・額娃組を例とする。「三州御治世要覧」によると薩摩国額娃郷は六ヶ村(仙田・拾町・御料・別府・牧之内・郡)からなる藩直轄郷²⁴⁾で、六ヶ村合計で高九〇一一石余、いずれも「表三」に記載がみられ

る。そして「表三」にあるように一郷で穎娃組というひとつの下代組を構成しているが、六ヶ村が川尻・石垣に区分され、蔵所在地はそれぞれ拾町村・御領村と記載されている。次に、穎娃組全体を描いた「薩州穎娃郡穎娃郷鹿絵図」⁽²⁵⁾より二つの下代蔵と蔵付村々の位置関係を確認すると、絵図において右側、方位にして南東側の端・開聞岳の麓に「川尻御蔵」が、絵図の左側、方位にして南西側の海岸に「石垣御蔵」が描かれており、それぞれ拾町村・御料村の庄屋所の近辺に所在している。そして絵図右側（南東側）の村々はいずれも「表三」で穎娃組川尻御蔵の蔵付村であり、左側（南西側）は「表三」で石垣御蔵の蔵付とされた村々である。つまり、基本的には地理的な遠近によつて蔵付先（あるいは、蔵の配置）が決められていたと考えられる。また両蔵とも河口部付近に配置されており、舟運による輸送・鹿児島湾への津出しが想定されている。同様の傾向は他郷の絵図においても確認でき、下代蔵の配置と組の構成の基本的なありようとみなせよう。

第三節 収納米に占める赤米

本節では、前節で確認した組分けのもとでの年貢米収納について考察する。

「表四」は、「史料一」・「表三」のD欄を内場・西目／東目外場・関外でそれぞれ集計したものである。収納高は合計九万八九一九石となり、さきに見た蔵入高の状況や、後述する藩の単年度米収支と照らしても無理のある数字ではない。これが薩摩藩の天保期ごろにおける年貢米収入の総計とみなせる。

注目したいのは、この数字に占める赤米の比率である。本史料が収納米について真米・赤米の区別を行っていることはすでに述べた。こ

表四 内場・外場別収納高

	真米（石）	赤米（石）	合計（石）	赤米比率（％）
内場	29604.524	8640.963	38245.487	22.59％
西目外場	27946.107	12053.795	39999.902	30.13％
東目外場	3913.227	3392.69	7305.917	46.44％
関外	10500.014	2867.91	13367.924	21.45％
計	71963.872	26955.358	98919.23	27.25％

「諸与免本給地高出来諸郷蔵々軒数取調帳」（東京大学史料編纂所蔵）より作成。

れを見ると赤米の比率はおおよそ二七％だが、比率の高い順に示せば東目外場（赤米四七％）を筆頭に、西目外場・内場・関外の順となっている。

赤米とは、野米・野良米・とほし米などとも呼ばれ、下々田などに作られる「下層の食用に供された」下等米とされる⁽²⁷⁾。脱粒性が高く風で落ちやすいが、早稲であることから台風襲来前の収穫が可能で、味には劣るが乾田・湿田問わず作付けのできる強靱な品種であった⁽²⁸⁾。このため新田開発の際には「尖兵」として盛んに作付けされていたが、近世入ると市場での価値の低さから「赤米排除の志向」があらわれ、領主の強制による促進もあり十九世紀にはほぼ駆逐されたという⁽²⁹⁾。しかし「表三」は、薩摩藩では近世後期においても蔵入米の三割弱がそのような下等米の赤米で構成されていたことを示す。同藩の米収入の大きな特色と言える。

薩摩藩でも、真米の作付地に対する赤米の作付を禁じる法令が明暦年間にすでに出ており⁽³⁰⁾、藩権力にとって赤米の増加は決して好ましいものと認識されてはい

なかった。しかしこうした禁令は赤米の広範な作付の事実と表裏の関係であり、事実、近世中期以降、赤米についてはその存在を容認する方向での規制がしばしば確認される。⁽³¹⁾元禄十四年には出来・重出米について半分を赤米で納めるよう定めており、財政補填を目的とした賦課の中でも赤米の存在はむしろ広く前提とされていた。近世において一般的に赤米の「排除」が進む中、頻繁に台風に見舞われるなどの米作に不向きな薩摩藩の地理的・風土要因が、このような赤米の根強い残存の背景となったと考えられる。

薩摩藩における赤米の存在については、松下志朗氏による指摘が存在する。松下氏は、赤米には「配給米」として活用された側面と、南島における飯料米として側面があったとして注目する。⁽³²⁾前者については赤米が「水手にのみ支給される階級制」を有していたとし、また後者については砂糖専売制の強化による南島のモノカルチャー化のなか、飯料米確保を目的として島内で作付が奨励されたとする。そこで、さきにみた全年貢米収入の三割が赤米という実態も踏まえ、藩の米支出について赤米が表示された史料からその特徴を確認する。

「表五」は、物奉行所の作成による宝永六年（一七〇九）・享保十二年（一七二七）の「米賦」⁽³⁴⁾を表化したもので、藩の米支出の一部について、その予算を示している。⁽³⁵⁾宝永六年については一万八〇〇石余、享保十二年については一万六〇〇石余の蔵米について、真米・赤米の区別を設けて「内場払」と「外城払」に宛てた高が書き上げられている。「内場払」については先の「表三」より鹿児島湾沿岸「内場」という認識があることを指摘したが、本史料では外城（諸郷）と対比されていることから、より限定された範囲「城下鹿児島を中心とした米の使途と解釈される。

「表五」を見ると、両年とも五〇%以上が赤米で支出されており、個別の項目では船手および普請方における支出で赤米比率が七〇%から八〇%を超えている。松下氏の指摘するように、動員された水手・人足に対する飯米・運賃米給付に赤米が優先的に用いられていたことを示していると言える。また、やや時代は下るが十九世紀初頭の赤米支給に関して、以下のような指示が注目される。

文化元年（一八〇四）、藩は真米不足を理由に諸郷・屋久島・道之島・琉球などに勤役する「奉公人」への扶持米について、これまで真米で支給していた中に赤米を用いることを命じた。⁽³⁶⁾真米・赤米半分ずつとして赤米の分を「一部半重」とする措置であったが、文化五年にこれらを旧に復せしめる。次に示すのはその時の指示である。

「史料二」歴代制度」巻之九

一、諸郷へ日差越候御奉公人御扶持米、一往真赤米半分ヅ、赤米分ハ壹部半重ヲ以相渡候様申渡置候ヘトモ、已前之通真米ヲ以可相渡候

一、諸船運賃米之儀、三ヶ一真米相渡候処、都テ赤米部重ヲ以可相渡旨申渡置候ヘ共、是又已前之通三ヶ一真米ヲ以可相渡候

右之通申付候条、如例可申渡也

文化五年辰五月八日

御勝手方印

伊集院平

諸船運賃米のうち真米は三分の一に過ぎず、残り三分の二は赤米支給とするのが通例であること、さらに文化元々五年の間はすべて赤米での支給となっていたことが示されている。「表五」の船手・普請方における赤米比率の高さは、このような奉公人、水主への賃飯米に赤米が多く宛てられている状況の反映と言える。

表五 宝永六・享保十二年の物奉行所米賦

宝永6年						享保12年					
No.	項目	真米(石)	赤米(石)	真・赤計 (石)	赤米比率 (%)	備考	真米(石)	赤米(石)	真・赤計 (石)	赤米比率 (%)	備考
1	客屋	340	470	810	58%	内80石江戸行船下積用	86.5	0	86.5	0%	
2	御厩方	167	120	287	42%		52	52	104	50%	
3	寺社奉行所						6.667	6.667	13.334	50%	
4	宗門改方										
5	御船手	156.4	1295.4	1451.8	89%		88.714	281	369.714	76%	
6	御普請方	312	1920	2232	86%	但、人足賃米半分銭ニテ払方 被仰渡置候へ共、銭払差留、赤 総様米払ニ被仰付候ニ付、赤 米重ニ候	213	1600	1813	88%	
7	御蔵	683	0	683	0%	内60石真幸御前米、48石尾張 白餅ノ間、35石酢米用					
8	御春屋						250	900	1150	78%	
9	御台所		567	567	100%		456.8	192.5	649.3	30%	内74石、真幸 枳
10	御前米						(148)				
11	御菟様御方渡方						149	0	149	0%	
12	信証院様御方御渡方						165.72	0	165.72	0%	
13	物奉行所	5212.3	2910	8122.3	36%		5456	4743.5	10199.5	47%	内20石、餅米
14	米蔵有之故、物奉行所 入用之内より差引申候	517.7	724	1241.7	58%		760	480	1240	39%	
小計		6870.7	7282.4	14153.1	51%	No.14は除く	6924.401	7775.667	14700.068	53%	No.14は除く
15	諸切米	665.5	585	1250.5	47%		500	1000	1500	67%	
16	毎月御扶持米	67.4	40.7	108.1	38%		67	40	107	37%	
17	諸所祭米	57	1355	1412	96%		57	0	57	0%	
18	諸所遠見番御扶持米	150		150	0%		110	0	110	0%	
19	久見崎御船手	400		400	0%						
20	於須磨様御渡方	533.3		533.3	0%						
小計		1873.2	1980.7	3853.9	51%		734	1040	1774	59%	
総合		8743.9	9263.1	18007	51%		7658.401	8815.667	16474.068	54%	

「歴代制度」巻之九より作成。

表六 文化年間の物奉行所米支出

項目	真米 (石)	赤米 (石)	琉米 (石)	真・赤合計 (石)	赤米比率 (%)
諸職人賃払	250	0.518		250.518	0%
御役料米・役料米・御切米	7570	4890	3154	12460	39%
年中扶持米	920	348		1268	27%
御小姓其外御心付銀並御扶持米	90	60		150	40%
助役々料米・御扶持米・御切米	1980	590	199	2570	23%
御仏餉払	100	11		111	10%
島渡海ノ人御扶持米	270	200	21	470	43%
万払	206		22	206	0%
樟脳仕込払	21			21	0%
利銀払	9			9	0%
造士館払	59	30	6	89	34%
頭屋方	27			27	0%
御厩払	252		35	252	0%
御薬園払		23	4	23	100%
合計	11754	6152.518	3441	17906.518	0.344

「歴代制度」巻之九より作成。「赤米比率」は真・赤合計に対するもので、琉米は含まれていない。

しかし赤米支給の対象は、こうした水主を中心とした領民のみにとどまらなかった。「表五」は、同じく文化年間における物奉行所の収支帳面より米収支に関してまとめたものである。⁽³⁷⁾ 真・赤米のみならず、米収支に琉米（琉球米）が組み込まれていたことも注目されるが、真米と赤米との関係を見ると、全体で一万八〇〇石余りに上る支出のうち三四％が赤米で占められている。支出のほとんどは扶持米・役料米関係と家臣団への支給に宛てられており、そこでの赤米比率は四〇％に近い。次章で検討するように、薩摩藩の全米支出のうち扶持米・役料米関係は総額四万石を超えるので、ここに現れているのはその四〇％程度に過ぎないと推察されるが、近世後期、家臣団への扶持米・役料米に一定の比率で赤米が用いられていたことを本表は示している。年貢米収納高のおよそ三割をも占める赤米を処理するため、対象として水主や南西諸島の住民のみならず、広く家臣団までも組み込まれており、⁽³⁸⁾ 品質に劣る米をなるべく領内消費で効率的に処理する志向が藩にはあったと考えられる。

このことは、宝暦年間に琉球王府に対し「琉米之内鹿米者於大坂御払直段引下り及御不勝手候間、可成程者大島卸米又者運賃米相渡候様、琉球へ可申越旨被仰渡候付」と申しつけ吟味を行わしていることからもうかがわれる。⁽³⁹⁾ これは琉米に関し品質に劣る「鹿米」は奄美大島へ供給するか、あるいは水主を対象とした船運賃米になるべく宛てるよう命じたもので、米の品質による大坂値段の高下を藩が明らかに意識していたことを示す。こうした意識のもとでは、品質に劣る赤米はなるべく領内消費に振り向けざるを得ない。その対象となったのは膨大な家臣団であり、特産品生産の強制と表裏の形で飯米給付の必要が生じた南西諸島の住民、およびそこでの海運に従事する水主たちであっ

たと考えられる。

第二章 近世後期における米収支とその特質

第一節 諸島と「統米」

本章では近世後期薩摩藩の年貢米収支の全体像について、同藩の天保改革を踏まえながら主に諸島「統米」と「大坂仕登米」に注目して考察する。後者はいわゆる大坂への廻米を示す史料上の表記だが、前者については薩摩藩政を大きく特色づけるものであり、本章および次章では特に取り上げたい。

「統」あるいは「統米」とは、特定の地域・機関の成立や運営の維持、およびその目的で供給される金銭・米を意味するものと解され、「二ノ丸統」「表方統」「江戸御統」あるいは「金山江御統」といったようなかたちでしばしば薩摩藩の史料に現れる。「統米」について、その用途は扶持米や諸産物の代米などさまざまであるが、堂島市場での売却を前提とする大坂廻米を「大坂統」「大坂統米」と表記した例は管見の限り見られず、これらはあくまで「仕登米」として厳密に区別されている。

「統米」のうち特に重要なのが南西諸島に対する「統米」である（諸島「統米」）。これは同地における薩摩藩の特産品生産（屋久島の平木、奄美諸島の砂糖）の強制と不可分に生じたものであり、先行研究の指摘する薩摩藩の財政構造と深くかわるものと考えられる⁽⁴⁰⁾。

次に分析の前提として、薩摩藩の天保改革について簡単に述べておく。

薩摩藩の天保改革は、隠居島津重豪・藩主島津斉興の信任のもと、調所広郷（笑左衛門）を改革主任として文政十年十一月から開始された。改革の三目標として①金五〇万両の備蓄、②これとは別途に御手当金・非常手当金の備蓄、③五〇〇万両に及んだ江戸・大坂・国許の古借証文の取返し⁽⁴¹⁾が調所に指示され、砂糖専売制の強化や藩債整理の強行にとどまらず、調所が江戸で死去する嘉永元年（一八四八）まで、農政・軍制ほか多方面にわたって展開された⁽⁴²⁾。

このうち、本稿にもっとも深く関係するのが三島（奄美大島・徳之島・喜界島）における砂糖惣買入の実施と、囲米である。囲米については後述とし、ここでは三島砂糖惣買入について、松下志朗氏の分析をもとにまとめておく。

松下氏によると、薩摩藩による三島砂糖の統制はおおむね四期（第一次定式買入制―第一次惣買入制―第二次定式買入制―第二次惣買入制）に区分される。転換点は第一次定式買入制（元禄八―安永六）下で年貢米の換糖上納が実施された延享期とされ、これ以前において藩は必ずしも稲作優先主義を放棄してはいなかったが、延享二年以後本格的に砂糖の収奪を強めていくという。

その後、定式糖・買重糖（追加分）の定額を買い上げる定式買入制と、砂糖すべてに専売制を敷く総買入制が交互に実施される。安永六・七年の短期間で終了した第一次惣買入制を挟み、天明七年から文政元年まで行われた第二次定式買入制下では、買重糖の額が順次増加され収奪が強化されていった。

そして天保元年（一八三〇）より「改革の大本」として始まった惣買入制は第二次砂糖惣買入制と呼ばれ、新たに三島方という役座が設置されるなど収奪が本格化する。島民は強制的に割り当てられた黍地

で砂糖生産を強いられ、定額の買上高である定式糖、および追加分の買重糖のほか、余剰分にあたる余計糖に至るまですべて藩が買上げ、私の売買は一切禁止された。余計糖の買上に際しても、島民は非常に不利な交換比率で必要物資と現物交換するか、あるいは島内でのみ通用する「羽書」に換えるほかなく、これ以前の古未進米や債務も棄捐され貨幣の流通は停止させられた。水田の黍地への強制的な転換、稲作の禁止までもが令達され、この期間に三島は完全に砂糖のモノカルチャーに緊縛された社会構造へと変容していったとされる⁽⁴³⁾。

右の過程で、本稿で特に住民の再生産に必要な諸物資の多くが藩からの供給に依存せざるを得ない構造となった点を指摘しておく。類似の構造は、良質な屋根材である平木の生産が強制された屋久島においても享保期ごろすでに確立しており、やはり島民の再生産に必要な諸物資、特に米については「屋久島（御）統」として藩による島外からの供給にある程度依存せざるを得ない状態にあった。

このように、年貢米収入に量・質とも限界を持つ藩が、活路を求め、南西諸島に対する特産品の生産を強制し収奪を強めれば強めるほど、その維持のため「御統」諸品（特に島民の飯米）の供給も恒常的に行う必要が生じ、必然的に藩の支出のあり方を大きく規定したと考えられる。このことが大坂への廻米や城下・諸郷の家臣団および領民への給付とどのように絡み合って展開することになったのか、次節以下で検討を加える。

第二節 弘化・嘉永期の米収支

次頁以降に示す「表七」「表八」は、「諸組御蔵入免本米并^{ミナ}駿地高出来等^{ミナ}総」（「諸組御蔵入免本米并給地高出来^{ミナ}総」の誤りか）をもとに作

成した。本史料は弘化四年（一八四七）一八四九）までの三ヶ年分について、「諸組」、すなわち前節に見た下代組を通じて収納された米・大豆・菜種子の収支を記した史料（の大正期の謄写本）となる。蔵入地からの年貢のみならず給地高に賦課された出来について記載しており、対象とする三ヶ年における国許の米収入全体をうかがうことができる。収納の対象となった蔵入高・給地高については対応する別の史料が存在し⁽⁴⁵⁾、本史料に記載された数字は蔵入地二六万七三・一四石余、給地高四七万・一三六八石余、道之島など諸島高合計五万五〇七二石余、琉球高を除けば合計七九万四七五四石余を対象としたものである（諸組御蔵入＋諸島高を合わせて蔵入高は計三二万・二三八六石余）。

本史料については、すでに上原兼善氏によって分析が行われている⁽⁴⁶⁾。同氏は本史料より「米年貢の大部分が藩内消費を余儀なくされ、その商品化は微量に過ぎない事実」を指摘すると同時に、その他貨幣収入や大坂表における収支にも触れたうえで、幕末薩摩藩の財政は南島特産物依存型にならざるを得なかったと評価した。以下、上原氏の評価も含め、関連史料を用いながら再検討を行いたい。なお行論の都合上、上原論文に掲出された内容との重複もあるが、筆者によるまとめを加えて提示したい。

まず「表七」より収入を確認する。「蔵入免本米（大豆）」・出来・重出米、加えて模合三合米、諸「引付を以上納」米・同業種子、「大山野見掛上納⁽⁴⁷⁾」が計上され、三ヶ年分を合計したのち「三ツ割」が計上される。つまり年平均を把握しようとする作成意図がうかがわれ、この点は後にみる支出についても同様である。米は年平均十三万石余を得ているが、免本米、つまり本来の年貢米収入は八万五千・七千石

表七 弘化四～嘉永二年の米収入

項目	種類	石			備考
		弘化4	嘉永元	嘉永2	
諸與御蔵入免本米	米	85,643.967	85,173.474	87,523.855	
	大豆	1,156.004	1,121.044	1,145.808	
	菜種子	6,131.574	6,148.909	6,096.604	
御当地并諸郷驗地高二相掛出来并重出来	米	45,212.177	44,321.935	44,251.116	「御当地并諸郷給地高二相掛出米并重出来」カ
模合三合米	米	1,218.032	1,243.108	234.978	
諸座引付を以上納米	米	302.441	347.440	298.546	
引付を以上納	菜種子			20.197	本文引付を以上納菜種子之儀未申両年者無御座候
大山野見掛上納	菜種子	34.600	34.867	34.112	

合計	米	大豆	菜種子
三ヶ年分	39万5770石6升9合	3422石8斗5升6合	1万8500石8斗6升3合
三ツ割ニメ壹ヶ年分	13万1923石3斗5升6合	1140石9斗5升2合	6160石9斗5升4合

「諸組御蔵入免本米并地高出等総」(東京大学史料編纂所蔵)より作成。

余にとどまる。対して財政補填のため給地高に賦課された出米・重出米が四万五千石ほどで米合計の三分の一以上を占めており、家臣団による負担分を大きく組み込んだ数字と言える。大豆については年千石程度とあまり大きくはないが、菜種子が各年とも六千石ほど収納があり、主穀類とともに書き上げられている点からは、藩が従来力を入れてきた特産物であったことをうかがわせる。⁴⁸⁾

次に、「表八」より支出を見てみよう。行論の都合上、ここでは米のみに限定して表を作成している。加えて、使用先などから大まかに支出項目を「い」御前粉、「ろ」江戸・京・大坂、「は」国許、「に」諸島、「ほ」諸鉾山・久見崎⁴⁹⁾、「へ」その他に分類した。表中数字欄の「」内は史料上粉表示であることを示す。なお、本史料では三ヶ年について各年の数値を挙げている場合と、いずれの年か不明な数値をひとつだけ挙げている場合の二つの記載が存在する。史料作成の際、三ヶ年平均、あるいは概算などという形でしか知り得なかったのだろうか。未詳とせざるを得ないが、No.8④のように「見賦」と表記されている箇所もあるので、過去の数字を参照しつつ、見積もりを記したものと推測される。また①、②というかたちである項目内にさらに記載があるものは、その項目の内訳を示すものであるが、詳しくは個々の分析で触れる。

支出のうち最も多いのはNo.6「役料米并諸座書役等扶持米払」四万石内外で、これは前年収納米から支出されている。また、No.7は同じ名目の支出だが本年収納の新米より支出されたもので(四〇〇〇〜一万石内外)、両者を合わせて「役料米并諸座書役等扶持米」の総額となる。これは諸郷から御当地(鹿兒島)へと集積され、役料米・扶持米として支払われた家臣団への給付であり、その幾分かが赤米であっ

表八 弘化四～嘉永二年の米支出

No	項目	米 (石)			備考
〔イ〕 御前粉	1 御前粉	弘化 4	嘉永元	嘉永 2	「右御前粉之儀者年々御定石ニ御座候」
	① 江戸御用	〔322〕			
	② 御国許御台所蔵	〔220〕 〔70〕			
	③ 御仕登粉	〔30〕			
〔乙〕 江戸・京・大坂	2 江戸御統米年々定石ニ御座候、尤詰人数御賄米等御払用	5400. 16 + 〔40〕			
	3 大坂仕登米年々御定石ニ御座候、尤大坂ニ而都而入札御払相成候	11866. 4			
	4 近衛様御合力米并京大坂詰諸人御扶持米用	950. 4			
	① 近衛様江被進用				
5 江戸大坂江御仕登米ニ相掛候運賃米本行通相及申候				「尤御船を以御仕登相成候得共石数相減申候」	
6	諸郷藏年／未／申秋取納米之内の御当地蔵江津廻等相成御役料米并諸座書役等御扶持米払用	40584. 167	37196. 834	40026. 509	
	① 御内用上リ	2014. 72	8243. 77	5751. 96	
	② 大島純	1700. 16	1070. 32 ?		
	③ 入札払	300. 16	105. 28		
7 + 未／申／酉秋取納米之内の未／申／秋年中御払米相成候	4830. 191	9161. 008	11245. 914	新米	
8	諸郷御藏々御囲米	16501. 06			
	① 内場御藏之御囲米年々新米囲替之上御当地蔵々江津廻ニ相成諸人御扶持米御払用	2867. 531			
	② 伊集院与清藤并串木野面御藏御囲米前條同断	1509. 48			
	③ 日州表御囲米之内京大坂諸人御扶持米古米を以御仕登相成候	250. 24			
9	④ 三島御純米五ヶ年並壹万五千石余之内六部通り古米を以御下方相成見賦差引 諸郷御藏々外場方限江残米ニ相成算当ニ御座候間帳未余未之内江相加へ置申候	9060			
	御当地蔵江御囲米年々御定石ニ而新米囲替之上諸人御扶持米御払用	3263			
10 諸郷御藏々の中万小払米右之通相及申候	10601. 582	2320. 213	11232. 2	9680. 234	
11 年々定石数ニ而申請被仰付置候	6867				「尤代銀先納之上御払相成申候」

	12	諸郷々出来糶実取納之上伐米被成下御蔵入免米米上納之方ニ差引被仰付候	2396.107	3038.657	1806.158	
	13	駿（給）地高総ニ付出米上納廻諸郷御蔵々々御払相成候石数	95.731	165.084	2864.499	「尤右通米之儀茂年々石数不同ニ御座候」
	14	+ 外ニ 当所出物蔵込御払相成候	2750.1	1946.4	1834.92	
	15	山川込砂漕御仕登積船運賃米石之通相及申候	5686.911	5063.579	5206.378	「尤依豊凶砂漕出来高多少御座候付運賃米之儀茂年々不同ニ御座候」
	16	三島砂漕御買入代米御統米	5348.735	7722.894	6412.587	
〔に〕 諸島 （三島・屋久島）	17	+ 諸郷御蔵々御囲米之内新米詰替之上島統米相成候	8755.654	6207.032	8572.361	
	18	三島砂漕惣御買入ニ付為本手用年々右石数ツ、被振向置御払相成申候		3000		「尤石数格別増減無御座候」
	19	屋久島四ヶ所蔵江御統ニ相成諸役井島々御扶持米平木代米等御払用	958	958	1004.16	
	20	鹿籠金山蔵江御統ニ相成山中役々御扶持米御買入金代米等御払用	687.491	651.147	645.185	
〔は〕 諸蔵山・久見崎	21	久見崎船蔵江御統米ニ相成諸船頭水手御切米等御払用	1184.777	1294.303	1894.694	
	22	山ヶ野金山蔵江御統ニ相成山中役々御扶持米御買入金代米等御払用	1162.483	1470.405	1388.873	
	23	谷山錫山蔵江御統ニ相成山中役々御扶持米御買入觔代米等御払用	746.464	840.969	1065.556	
	24	大坂御仕登米之内本行石数年々被引残置追而何そ之御用米ニ御払用		5000		
〔へ〕 その他	25	江戸御統米之内年々本行石数被引残置前條同断追而何そ之御用米払用		1530		

※〔 〕内=枳

項目		米(石)	備考
三ヶ年分合米		382378.272	
(一ヶ年平均)		127459.424	
差引		13391.797	
三ツ割ニメ		4463程	「右惣行御米賦付之外二芒ヶ年分余米相成賦御座候」
諸郷御蔵々御囲米之内諸御払残リ余米ニ相成算当ニ御座候		3263程	
前條二者払扱（マヅ）相成居中候得共現米御払不相成御囲米ニ御座候間余米之内江相込差上申候			
大坂御仕登米引残		5000	
江戸御仕登米引残		1530	
四口合 余米		14256程	

「諸組御蔵入免本米并駿地高出来等総」(東京大学史料編纂所蔵)より作成。

たことはすでに述べた。なお、本史料から十四年後にあたる文久三年の改革上申案で「十年以前迄は御扶持米払四万石位二而済来候由二御座候」と述べられていることから、⁽⁵⁰⁾役料米や扶持米といった家臣団への給付を総額四万石程度とするのは近世後期の薩摩藩財政において一般的な認識であったと考えられる。

次に数字が大きいのはNo.8「諸郷御蔵々御囲米」で、一万六五〇一石余にも及ぶ。No.9の御当地（鹿児島）における囲米と合わせると一万八八二一石にも及び、備荒貯蓄への注力ぶりがうかがわれる。この囲米は詰め替えにより発生した古米の運用についても記述があり、極めて興味深い内容を持つが、詳述は次節で述べたい。

このほか、No.11「年々定石二而申請被仰付置候」六八六七石が注目される。「申請」は払い下げの意であるが、⁽⁵¹⁾備考欄にもある通り、ここに示されているのは代銀先納のうえでの払い下げである。本史料と同じ三ヶ年について貨幣収入を示す史料が存在するので参照すると、申請米代金は平均一万三八〇七両にも及んでいることが確認できる。⁽⁵²⁾払い下げ先はおそらく城下の米問屋と思われ、⁽⁵³⁾多くが領民の飯米として消費されたと考えられる。

いっぽう、⁽⁵⁴⁾No.3大坂仕登米は一万一八六六石が「定石」とされているが、これは後述する文政―天保期の水準と照らしてみても大きく逸脱する数字ではない。表高七〇万石余の薩摩藩が大坂の米市場へ送り込む蔵米は、二万石弱程度に過ぎなかった。しかし「諸島」欄に振り分けたNo.16からNo.19までの三島（大島・徳之島・喜界島）・屋久島にかける「続米」支出の大きさは注目され、年平均の合計は約一万八三二三石にも及ぶ。藩は多額の米を費やしてこれらの諸島経営にあたっていた。南西諸島の特産物に依存する財政構造が、このように

特徴的な米支出を形作ることとなったと考えられる。

第三章 調所広郷の改革と年貢米運用の変化

第一節 囲米と古米の処理

本章でも引き続き「表八」の年貢米支出を素材として、特に「は」国許と「に」諸島との関係について、前章で詳述を避けた囲米との関わりから見ていく。

まず、薩摩藩の囲米政策について述べておく。薩摩藩における囲米は幕府の指示等に基づき以前より行われており、弘化元年（一八四四）までに蔵入・給地に高割で計三万六四七八石の囲米を整えた⁽⁵⁴⁾とされる。しかし、天保改革ではこれらと並行して新たな囲米政策が進展した。改革以前には異国方御囲米と称し都合一〇九二石余が存在していたが、⁽⁵⁵⁾これに加えて天保六年（一八三五）より「御手許御内用方御囲米」の貯蓄と年々の詰め替えが開始され、天保十一年までに囲高は一五六五〇〇石にのぼった。⁽⁵⁶⁾この囲米はさらに近年中に三万石、ゆくゆくは五万石とする計画であったというが、「表八」から見たように、嘉永二年段階での詰め替え高は諸郷御蔵々で一万六五〇〇石余（No.8）、御当地Ⅱ鹿児島蔵で二三二〇石余（No.9）の合計一万八八二〇石余にとどまっている。

「表八」No.8「諸郷御蔵々御囲米」で注目されるのは、本項目は詰替を目的に支出されたもので、入れ替わりで必然的に発生する古米の運用先に関する「見賦」が「内書」として示されている点にある（No.8①～④）。これによると、まず内場の諸組・外場のうち伊集院組に

ついでに詰替のうえ古米を「津廻二相成」して諸人の扶持米とし①、②、日州Ⅱ日向諸県郡を中心とする関外諸組からは京・大坂の諸人扶持米として同地へ差登せるとしている③。古米についても、四〇〇〇石あまりの消費先に家臣団が想定されていた。

次に、No 8④では「三島御統米」の五ヶ年平均を一万五〇〇〇石とし、その六部通Ⅱ六割にあたる九〇六〇石を詰め替えによつて生じた古米で支出するとしている。そこで本表内の諸島「統米」を見てみると、No 17「諸郷：御囲米之内、新米詰替之上島統米相成候」として、「島統米」に諸郷囲米の詰替時に生じた古米より支出されている項目が存在し、対応がみられる。ただしNo 17は大豆も含む旨の記載があるのですべてが古米とは言えず、また三ヶ年ともNo 8④で示された九〇六〇石には届いていない。しかし、この九〇六〇石はあくまで「三島統米」の五ヶ年平均を一万五〇〇〇石とし、これを母数に算出した数字であり、見積もりともいうべきものである。本表において「三島統米」に該当するのはNo 16・17であるが、弘化四年と嘉永二年分について見ると合計一万四〇〇〇〇石程度となるので、「五ヶ年並」一万五〇〇〇石に近い値は得られる。No 8「内書」の示す「見賦」はある程度実態に即して算出されたものと言える。

このように、天保期には調所の改革で囲米政策が拡大したことに伴い、古米が比較的大規模に生じることとなった。売値の低下が避けられないこれら古米の処理にあたり、ここでも藩は領内消費にこれを用いることを志向していた。膨大な家臣団を維持していくための扶持米、および専売制強化に伴い恒常的な飯米供給が必要となった諸島「統米」へこうした低品位の米を振り向けることで、藩は大坂の堂島市場で売却する真米の確保に努めていたと言える。上原氏の指摘するよう

に「米年貢の大部分が藩内消費を余儀なくされ、その商品化は微量に過ぎない」中でも、藩はなるべく大坂廻米を意識し続け、品質による振り分けで対応しようとしていたと言える。

なお、原口泉氏は、安政期に島津斉彬の設置した囲米施設である常平倉⁽⁵⁷⁾に関する論考⁽⁵⁸⁾の中で以下のように述べている。原口氏は、常平倉政策が実現した理由のひとつとして、砂糖惣買上制により貨幣経済から遮断された奄美諸島が古米の運用先となったと指摘し、斉彬期に砂糖惣買上制が沖永良部島まで拡大した背景には、単なる収奪強化ではなく「古米の運用という独自の理由」⁽⁵⁹⁾があったとする。本節で見たように、天保期の囲米政策が南西諸島の砂糖収奪と結び付けられていたという点については確かに指摘できよう。

第二節 調所の改革と大坂仕登米

「表八」(に)を見ると、諸島へ宛てられた米はNo 8④で五ヶ年平均とされた「三島御統米」一万五千石余 (No 16 + 17が対応)、三島砂糖惣買入の「本手」三〇〇〇石 (No 18)、そして屋久島の「御統」「御扶持米」「御買入平木代」約一〇〇〇石余で、合計一万九〇〇〇石となる。これは一ヶ年の米支出全体のおよそ十五%にも及び、出米・重出米を除いた年貢米収入八万五〇〇〇石を母数とすれば二〇%を超えることになる。この数字は大坂で売却される大坂仕登米 (No 3) を凌駕する数字である。諸島を中心に特産品に依存したとされる薩摩藩財政の特徴がよく表れている。

いっぽうで、当該期の薩摩藩が大坂廻米を意識し続けていたのはこれまで述べてきたとおりである。調所広郷の改革でも三島砂糖を改革の根本に据えながらも、下代蔵における綱紀肅正といった年貢収納機

構の引き締め、とりわけ肥後米を手本とした俵作の工夫や唐箕の導入などによる年貢米の収納量増加・品位向上が積極的に進められていた。次に示すのは天保十一年に調所が改革を総括して報告したもので、先ほど述べた米の品位向上に向けた取り組みが記されている。

〔史料三〕「調所広郷履歴」

右（文政元年～天保十年までの大坂仕登米高および石別代銀の書上）者、大坂表御仕登米之儀、全体綿密之御規定者有之候得共、段々不行届罷成御改革以前二相成候処、入実ハ壹俵ニ付三斗四升程宛モ有之、右ニ準シ俵作等別而匱末ニ成立、船中取納場之洩米等過分ニ有之、（中略）殊ニ米拵等モ不宜候ニ付、其時分ハ薩摩米ト申候得者米屋共望ミ不申振合故、直段モ格別下落仕候処、御改革ニ付以前之御規定ヲ本ト致シ猶不引足儀者増補仕候テ、米拵・取納拵目・俵作等迄綿密取調、何届肥後米ヲ手本ニ致シ、大坂ヨリ唐箕買下、亦者俵占道具等作調、連年手堅申渡候処追々行届、当分ニ至リ候処、米性ハ致方モ無御座候得共、拵方・俵作・入実ニ付而ハ諸国出產ヨリ上ニ罷成、大坂堂島ニ而モ評判立直リ候、折柄去春払口之儀相改候訳モ御座候故、一涯米問屋共氣請宜敷罷成、御払口相進ミ至極之御都合罷成候

調所による天保改革の成果報告としてよく知られる史料だが、先行研究では改革を評価する際しばしば要約的に触れられるのみである。

〔表九〕に右の史料で省略した大坂仕登米高をまとめた。仕登高は改革以前の文政期に比してむしろ減少に転じており、二万石以下で推移している。同時期に発生した飢饉・凶作等に影響された結果と考えられるが、別の要因をこの後検討したい。

また〔図二〕は同じく〔史料三〕で省略した米値段について、変動

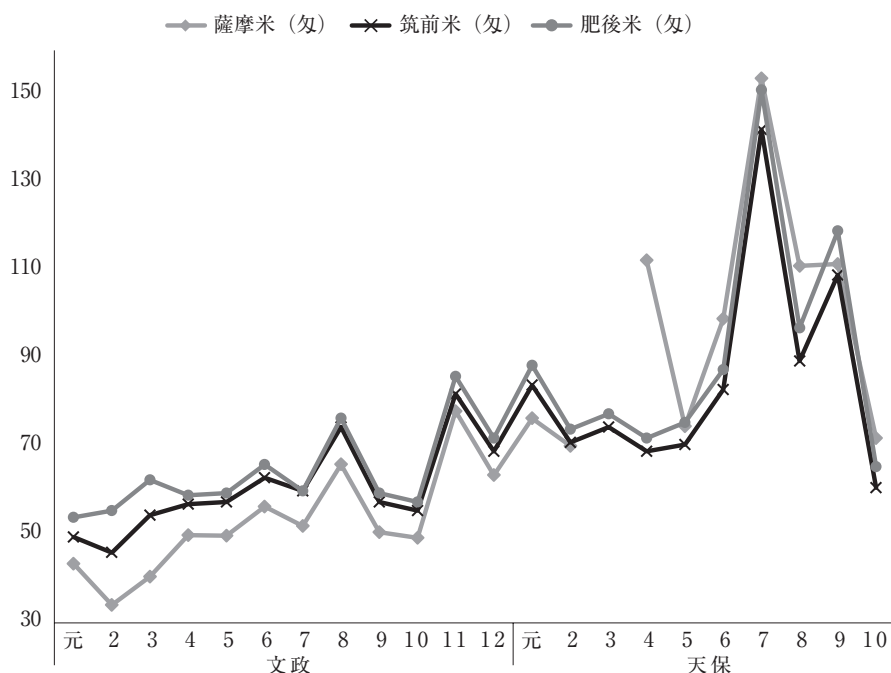
表九 文政元～天保一〇年の薩摩藩大坂仕登米と大坂相場

		仕登石数	薩摩米(匁)	筑前米(匁)	肥後米(匁)
文政	元	18650	43.435	49.5	54
	2	19910	34.078	46	55.5
	3	23150	40.502	54.5	62.5
	4	22350	49.919	57	59
	5	23788	49.802	57.5	59.5
	6	16413	56.412	63	66
	7	15500	52.031	60	60
	8	13827	66.009	74.5	76.5
	9	12840	50.591	57.5	59.5
	10	15910	49.322	55.5	57.5
	11	13757	78.088	82	86
	12	10440	63.563	69	72
天保	元	11510	76.473	84	88.5
	2	8534.4	70.187	71	74
	3			74.5	77.5
	4	7584	112.337	69	72
	5	12328.32	74.662	70.5	75.5
	6	15725	99.067	83	87.5
	7	12163.2	153.632	142	151
	8	16726	111.08	89.5	97
	9	12672	111.525	109	119
	10	15000	72	60.7	65.5
12ヶ年平均		17211.25	52.812	60.5	64
10ヶ年平均		12524.132	96.383	85.32	90.75

〔調所広郷履歴〕、山崎隆三『近世物価史研究』（塙書房、一九八三年）所収第二七表より作成。

を見るためグラフで示した。調所が何を典拠にこれらの数字を挙げているのかは判然とせず単純な比較は困難であるが、参考として筑前米・肥後米の同時期の価格も併せて〔表九〕とともに示している。両者はともに堂島米市場において、相場基準ともなり高値で取引された建物米にもしばしば選出される四蔵⁶¹の米である。『県史』は薩摩米の値段上昇について「右の如き倍加に近き売払価格の上昇は、農政改革の結果と見なければならぬ。当時の肥後米等の大坂相場の変動と比較すれば、この点は一層明白であらう⁶²」とするが、基本的には薩摩米の動向は肥後米・筑前米の動向と連動しており、『県史』が強調する

図三 文政元～天保一〇年の大坂米相場変動



ほどの顕著な差は見られない。⁽⁶³⁾しかし文政年間には筑前米・肥後米に比べ低価であるところ、天保四年以降はこれらに匹敵する価格を示している点は注目される。

「史料三」傍線部でも述べられるように、調所は「米性合」は「無致方」きものとして一定の見切りをつける一方、収納機構の綱紀肅正や升目の厳正化等を通じ「拵方・俵作・入実」の改善による「米屋共氣請」の向上を目指した。結果、薩摩米というだけで望手がなく価格も下落するといった以前の堂島における評価が回復し、「御払口」も進んで都合がよくなったとする。堂島における建物米の選定基準のひとつに俵装の均一性が重視されたことを踏まえると、調所の政策は有効なものだったと評価できる。調所は四蔵米のひとつでもある肥後米を手本としているが、同じく十八世紀後半より建物米への選定を「悲願」として熱心な取り組みを行った佐賀藩でも、俵装の厳格化・均一化が大きな柱となっていた。⁽⁶⁵⁾こうした取り組みの結果、薩摩米の「評判」が回復し、仕登高の減少の中でも価格向上が達成され、調所をして改革の成果と自負する結果となったと言える。

第三節 大坂仕登米の減少

再度、「表八」に戻り、前節で触れた大坂仕登高の減少について考えてみたい。嘉永元年前後で大坂仕登米は一万一八六石余（No.3）であったが、先述のようにこの数字は天保期の水準から大きく逸脱したのではない。しかし、前節で述べた通り天保期は大坂仕登米が減少した時期でもあった。その理由の一つに領内の凶作・飢饉が挙げられるが、それとは異なる理由があったことを最後に本節で検討する。

「表八」〔へ〕「その他」欄に仕分けしたNo.24を見ると、No.3とは別

に、大坂仕登米のうち五〇〇〇石が「年々」「引残」され、「何ぞ之御用米」に用いるとされ分割記載されている。つまり、本来の大坂仕登米は一七〇〇〇石程度であったことになる。また江戸仕登米についても同様で、No.25で一五三〇石が同じく「引残置」かれている。この合計六五三〇石について、上原兼善氏は「実質的な余米」であり、「緊縮政策にもとづく消費抑制、非常入用にそなえた飢餓備蓄の産物に他ならない」と評価する。⁶⁶しかし別の史料より、こうした「引残」米を含む当該期の江戸・大坂仕登米について、少々異なる事情を読み取ることができる。

「表一〇」「表一一」は、「御産物仕登金銀御蔵納高万控」⁶⁷（以下、「納高万控」。大正期の謄写本）と題する史料にそれぞれ「大坂御仕登米」「江戸御統米」として立てられた項目をまとめたものとなる。それぞれ江戸・大坂へ仕登せる年貢米の詳細を示している。

これを見ると、「表一〇」No.1「大坂現仕登」が「表八」No.3「大坂仕登米年々御定石ニ御座候」と一万一八六石四斗で斗の値まで正確に一致しており、「表八」No.24で大坂仕登米の引き残しとされる五〇〇〇石も、「表一〇」No.3の大坂仕登米の引き残し五〇〇〇石に対応することがわかる。

また「表一一」No.1「江戸現統」は「表八」No.2と正確には一致しないものの比較的近い値であり、大坂仕登米同様、「表八」No.25の引き残し一五〇〇石がやはり「表一一」No.2と一致している。このように、両史料（正確には、その原本）は対応を示すもの考えられる。その他の項目が完全には「表八」と対応しないのは、「表八」のもととなった「諸組御蔵入免本米并驗地高出来等総」の原本が、弘化四・嘉永元年の両年を参照しつつ嘉永二年のどこかの段階で算出したある種

の見積もりとも言うべき性格のもので、実際の支出は（一部のみ）「御産物仕登金銀御蔵納高万控」の原本が示していることからくる齟齬と考えられる。その理由としては、「諸組…総」（「表八」）では、帳末の差引において「右壹行、御米賦付之外ニ壹ヶ年分余米相成賦御座候」とするように「賦」＝見積りを述べるような箇所がいくつか見られるのに対し、「納高万控」（「表一〇・一一」）では「被仰渡置候」などと記載が事後的であることが挙げられる。また「表一〇」No.6「去申年」とあるように、「納高万控」は申年＝嘉永元年の翌年以降の時点での記載をもつ。

以上より、ここでは「納高万控」は嘉永二年の江戸・大坂仕登米の実際の処理を示す史料と考えよう。

「表八」No.24・25で「何ぞ之御用米」払用として「引残」された大坂仕登米五〇〇〇石・江戸御統米一五三〇石は、「表一〇・一一」より、実際にはそれぞれ御統・仕登米定石のうちから出水・川内・肝付三ヶ所に「引残」されたもので、「御内用上り」として町人へ売り支配を命じ払い下げるのが通例となっていたものであることが確認できる（「表一〇」No.3、「表一一」No.2）。「内用」は藩主が「御手許ヨリ親シク御指揮」⁶⁹する際用いられる言葉で、「内用上り」は藩主の御手許へ上がる際などにしばしばみられるが、この時期、江戸御統米・大坂仕登米の一部が国許にとどめおかれ、「御内用上り」すなわち藩主（または、その側廻諸役）の判断のもとで処分されていたことを示すと考えられる。調所広郷を筆頭に、藩主直仕置体制の強化された天保期以降の藩政の特質をよく示している。

さて、上原氏は「諸組…総」の記載のみからこれ余剰米について、「緊縮政策にもとづく消費抑制、非常入用にそなえた飢餓備蓄の産

表一〇 嘉永二年の大坂仕登米内訳

No	項目	真米(石)	大豆(石)
1	大坂現仕登	11866.4	0.64
2	大坂仕登米之内、近衛様御合力米・京大坂諸人御扶持米トメ斤目升目等兵庫継船米同様差登候様被仰渡置候	811.84	
	京大坂諸人御扶持米用トメ、日州表古米被差登候付、右員数出水・川内・肝付表三方限へ引残候様被仰渡置候	250.24	
3	大坂現仕登米1万6866石4斗之内、右員数出水・川内・肝付表三方限へ引残候様被仰渡置、是迄御内用上リニテ町人等へ売支配被仰付候株	5000	
4	三島砂糖惣買入ニ付、出水・川内・肝付表三方限大坂御仕登米ノ内右石数以本手用御払被仰渡置候	3000	
5	大坂御仕登米ノ内、大島・屋久島卸寄返米トメ積下候様被仰渡置候	3480	
6	琉球産物方為御本手用琉米1500石申請被相渡、大坂御仕登米ノ内琉球産物方ヨリ大坂御蔵へ先納ニテ、右1500石丈御物方御用トメ内場繰入被仰渡置、産物方御余勢銀相少ク1500石産物方へ被差出大坂御仕登米株ニ而、別段之金筋ヲ以大坂不差様被仰付候、繰入ニ付テハ外御用米同様去ル申年々貳拾ヶ年被仰渡置候	1500	
7	周防殿領分志布志伊崎田村上納米、右石数依頼末吉岩川中取蔵取建ニ而被致取納、夫丈ケ大坂切手米上納被仰渡置候	460	
8	内匠殿持米・諸出米、去ル卯秋の2355石余右之内重出米丈年々証文入付相成候間、右外残り右通之員数大坂御蔵へ代銀上納被仰付置候	1774	
9	大坂御仕登米ノ内、内島々牛馬皮代米トメ差下方被仰付、代銀之儀ハ琉球産物方計ニ而大坂御蔵へ上納被仰付置候	19.6	
計	合新米	27911.84	
	合大豆		0.64
	近衛様御合力米并京大坂諸人御扶持米株	811.84	

「御産物仕登金銀御蔵納高万控」(東京大学史料編纂所蔵)より作成。

表十一 嘉永二年の江戸続米内訳

No	項目	真米(石)	真粳(石)	大豆(石)
1	江戸現続	5599.4	40	60
	川内表の江戸へ直送	1280		
	肝付表の同断	1300		
	川内・肝付・出水方限ヨリ割合、兵庫継船ヲ以江戸御続	3019.4		
2	江戸御続7030石ノ内、右員数出水・川内・肝付三方限へ引残候様被仰渡、是迄御内用上リニテ町人等へ売支配被仰付来候株	1530		
3	同断御続之内、旁申秋の1600石被相減、大坂御仕登相成候付運賃出目取合、右員数去申秋の五ヶ年益田平兵衛へ代銀大坂廻出成ニ大坂金目ヲ以御当地御蔵へ高足銀相付先納申請被仰付置候	1720		
4	同断御続之内、江戸詰御兵具方足輕其外田町人足等へノ被相渡候昼飯米丈450石代銀続被仰渡置候処、運賃出米取合、右之員数去ル辰秋の先キ五ヶ年濱田十左衛門へ右平兵衛同様之向ヲ以申受被仰付置候	486		
5	同断御続之内100石・運賃米12石都合112石、去ル未年々御当地御払立之上、代銀続之被仰渡置候得共、去三ヶ年の御続不及候	112		
6	江戸御続大ツノ内、右之石数於御当地御払之上代銀江戸へ差登候様被仰渡置候而入札被仰渡置候		110	
計	合真米	9447.4		
	江戸御続米	9279.4		
	大門寺御仏餉米并益田平兵衛・濱田十左衛門申受運賃出目株	168		
	合大豆			170
	合真米(粳カ)		40	

「御産物仕登金銀御蔵納高万控」(東京大学史料編纂所蔵)より作成。

物」と判断していたが、「納高万控」を参照すれば、これらの米はむしろ積極的に領内へ放出されていたことがわかる。そして「是迄…売支配被仰付候株」とあるように、この年に限った措置ではなく、常態化した支出であった。

この払下げをどう評価するかは難しいが、背景のひとつに考えられるのは、同時期の領内における米需要の高まりである。囲米政策のなかで調所が「御領内之儀者全体米不足之御国二御座候」と述べているように、近世後期、薩摩藩は領内で米不足をしばしば発生させ、天保改革においてもこれは問題とされた。⁷² 先述の囲米政策もこうした米不足への対応策として打ち出されたものに他ならない。安政年間から進められた長州・芸州との藩際交易においても、薩摩藩は輸入品として米を要望している。⁷³ 領内の米需要に対応した措置であった可能性を指摘しておく。

加えて「表一〇」は、大坂仕登米と諸島「統米」との深いかわりも示している点が注目される。「表一〇」No.4を見ると、「表八」No.18における三島砂糖惣買入本手用三〇〇〇石は、さきの江戸御統米同様「出水・川内・肝付表三方限大坂御仕登米ノ内」から「振向」けられていたことが確認できる。ここでも両史料は対応しているのである。「石数格別増減無之候」とあるように、大坂仕登米のなから砂糖買入代として定額を毎年「振向」ける体制が、少なくとも弘化・嘉永期には常態化していた。調所の改革による砂糖惣買上の強化に伴う措置であろう。第二次惣買入制下での砂糖代米は、大坂仕登米を削って拠出されていた。

またこちらは「表八」との対応は判然としないが、「表一〇」No.5では「大坂御仕登米ノ内、大島・屋久島卸寄返米」として三四八〇石

が積下されている。「卸寄返米」の意はやや不明確だが、ここでもやはり大坂仕登米が本来の用途を外れて諸島関連の消費に充てられていると考えられる。「表八」での数字とあわせると、三島御統米・砂糖買入代のおよそ三分の二は、囲米の詰め替えによって生じた古米と、大坂仕登米の転用によって賄われていたことになる。天保期の大坂仕登米が減少傾向にあったのは、このような年貢米運用の変化（大坂仕登米の「引残」、国許での払下・砂糖代米への振り向け）によるものであったと考えられる。藩が飢饉移出的な大坂廻米に陥らず、このようにある種柔軟な仕登高の調整を行っていたのには、有力な大坂銀主からの借財の担保が主に米ではなく砂糖であった点とも関わると考えられる。⁷⁴ その意味では、大坂への強い志向と一見相反するような仕登米の削減という措置も、借銀担保としての砂糖確保を目的とする以上は藩の大坂金融市場への依存の深まりを端的に示すものとして理解できるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、近世後期における薩摩藩財政について、主に年貢米収支を中心に分析を行った。従来指摘されてきた米収入の脆弱性を数量的に検討し、また同藩財政の強みとされた特産品生産との間に深い関係があったことを提示した。特に諸島経営において必然的に必要となった「統米」の存在を改めて史料の上から指摘し、その運営の在り方こそ薩摩藩財政の特質が表れていることを見出した。以下、小括と今後の課題を述べる。

薩摩藩の年貢収納は下代蔵による組分によって実現されており、各

郷・村々は近隣の蔵の蔵付となっていた。この機構を通じ収納される年貢米はおよそ三割近くが低品質な赤米であったことは、薩摩藩財政を大きく規定した。藩は赤米の存在を前提とした財政運営を迫られ、大坂市場向けの真米を確保するため、これら低品質の米をなるべく領内消費に宛てることを志向する。その対象となったのが、多額の扶持米・役料米を必要とした膨大な家臣団であり、特産品生産の強制で飯米の必要となった南西諸島民、およびそこでの海運に従事する水主たちであった。

近世後期において、藩の米支出の第一は家臣団への扶持米・役料米給付であり、大坂仕登米は二万石内外にとどまった。いっぽう諸島「続米」はこれを凌駕していた。しかし、砂糖惣買上を強化した調所広郷の天保改革の中で米の大坂志向は失われておらず、古米を諸島「続米」として領内消費へ宛てたほか、佞装の改善を通じて薩摩米価格の上昇につとめ、これは有効に作用した。

しかしながら、大坂仕登米の減少という現象が並行して発生する。これは凶作の影響とともに、領内、とりわけ特産品生産を強制され南西諸島に恒常的な「続米」が必要となったための措置であった。藩は同地の「御続」を達成するため、あえて大坂仕登米の削減を行った。こうした調整を行いえた背景には、大坂金融市場において、担保としての砂糖が米に優先されていたという薩摩藩独自の事情も存在していたと推察される。

今後の課題は、国許における貨幣収支、および大坂・江戸収支との相互関係の解明である。いずれも「島津家本」中の関連史料からある程度の復元を期待できるが、いずれも謄写本である関係上、慎重な史料批判が必要となる。同時期、諸藩による和製砂糖の生産拡大により

次第に劣勢に立たされつつある中、薩摩藩がどのような財政運営を模索したのか。砂糖を主柱にして関係を結んでいた大坂金融市場との関係解明も必要である。

また今回、財政運営という点において、意思決定も含めた役所・役職等の藩政機構の問題を検討しえなかった。天保期、薩摩藩は調所および藩主斉興の主導のもと、藩主側廻諸役の権限が拡大し強権をふるったため、様々な問題を発生させたことが知られている。⁽⁷⁵⁾こうした藩政機構の変化が財政の実態面とどのように関係し展開していくのか、引き続き検討を行いたい。

註

(1) 土屋喬雄『封建社會崩壊過程の研究 江戸時代における諸侯の財政』弘文堂書房、一九二七年、三五八―三五九頁。

(2) 天保期以前の藩財政窮乏化について、山本弘文氏は「支出と収入のアンバランスは、決して剰余生産物に対する藩権力の把握が不十分なためにもたらされたのではなく、その完璧さにもかかわらず把握される生産物の絶対的な少なさによつてもたらされるのであるということであった。いうまでもなくこのことは同藩の生産力が、強度の搾取にもかかわらず、中期以降の全国的な商品経済の発展にともなう領主側の貨幣需要を、満足させることが出来ないほど低かつたということであり、ここにこそ同伴財政窮乏化の構造的な性質があつたものと考えなければならない」とする(山本「薩摩藩の天保改革―改革前の状態と改革の歴史的性格―」『経済志林』第二四卷三号、一九五六年)三九頁。

(3) 上原兼善「天保期における領主権力の動向―島津氏の場合―」

〔秀村選三編〕『西南地域史研究』三、文献出版、一九八〇年）三九一四〇頁。

(4) 松下志朗「幕末期の門割制度と農業形態」(松下『鹿児島藩の民衆と生活』南方新社、二〇〇六年、初出は福岡大学『文理論叢』第十二巻三号、一九六六年)。

(5) 松下志朗『鹿児島藩の民衆と生活』九頁。

(6) 先掲註(三)上原論文。

(7) 朴澤直秀「島津家本」の構成と形成過程」(東京大学史料編纂所『東京大学史料編纂所研究紀要』第八号、一九九八年)。

(8) 天明四年四月に外城は郷と改称されるが、本稿では近世後期を対象とするため、以下では特別断らない限り郷と呼称する。

(9) 明治四年における人口総計七万二三五四名のうち、士卒は二〇万三七一一名で二六%にも及ぶ(原口虎雄「薩藩郷士生活の経済的基礎」〔秀村選三編〕『薩摩藩の構造と展開』西日本文化協会、一九七一年)。初出は『九州経済史研究』三和書房、一九五三年(二一七頁)。

(10) 秀村選三・桑波田興・藤井讓治「藩政の成立」(岩波講座『日本歴史』一〇、一九七五年)。

(11) ただし、農地荒廃などをうけて御救を名目とする個別の検地はその後も各地で行われた。

(12) 『斉彬公史料』第二巻(鹿児島県、一九八〇年)、史料番号二二二。以下、巻数と史料番号のみ記す)。

(13) 『鹿児島県史』第二巻、一九四一年。以下、特に断らない場合本文では『県史』と表記。

(14) 上原兼善「薩摩藩における軍制改革―弘化四年の「給地高改

正」の問題を中心に―」(秀村選三編『薩摩藩の構造と展開』所収)三三二―三三三頁。

(15) 以上の説明は、特に註記のないものについては『鹿児島県史』二、八七―九三頁に拠った。

(16) 「下代蔵役人トハ、各御蔵々取納米・錢等出入ヲ掌ル役人ヲ云フ、下代ノ名唱ハ其語義ノ因テ起リシヲ詳ニセス、此役職ハ毎年八月朔日ヲ以テ、新古交替ノ規定ナリ」とある(『斉彬公史料』第一巻、文書番号二二二)。

(17) これに対し、給地においては年貢納入も給人のもとへ直接なされる原則であった。しかし高山郷に所在する城下士の給地の百姓が、城下まで年貢を輸送する労を厭い近隣の下代蔵への納入を請願するなど、近世後期には直轄地における年貢納入組織を給地からの年貢納入に利用しようとする動きもあった(秀村選三「薩摩藩郷村における給地の存在形態―大隅国高山郷における鹿児島給地」〔秀村編〕『薩摩藩の構造と展開』)。

(18) 『鹿児島県史』第二巻、三五六―三五七頁。

(19) 東京大学史料編纂所蔵、収蔵番号…島津家文書八―一二―一七。

(20) 「中取蔵」の意は判然としないが、本蔵に次ぐものか、あるいは中継地点のような意味合いであろうか。

(21) 『鹿児島県史』第二巻、三三二頁。

(22) 表中の菱刈組・羽月郷下之木馬場の下代蔵は、天保改革の一環として天保十四年七月に建設された(黒田安雄「天保期薩摩藩の農政改革―受持郡奉行制の実施と上見部下りの廃止について」『西南地域史研究』七、一九九二年)。よって同蔵の記載を持つ

本史料はそれ以降について示すと考えられる。

- (23) 『鹿児島県史』第二巻、三五六―三五七頁。
(24) ただし、池田村のみ隣接する今和泉島津家の私領に編入されている。

- (25) 東京大学史料編纂所蔵、収蔵番号…島津家文書六〇―七一。
(26) 基本的に諸蔵とも沿岸部に位置している。ただし川内組・山崎組・隈之城組・祁答院組などは内陸部にも蔵が配置されているものの、いずれも川内川に沿ったもので、やはり舟運による輸送が前提とされている。

- (27) 『鹿児島県史』第二巻、三六六頁。

- (28) 福岡紀子『赤米のたどった道 もうひとつの日本のコメ』吉川弘文館、二〇一六年、八九頁。

- (29) 深谷克己「赤米排除」(『史観』第一〇九冊、一九八三年)。

- (30) 『鹿児島県史』第二巻、三六六頁。

- (31) 例えば次の元禄十四年(一七〇二)の史料では、城下士・郷士(改称前のため鹿児島衆中・外城衆中)ともに出米を真米・赤米半分宛で納めることを定めている。

元禄十四年巳、寺田堅右衛門日帳之内

覚写

- 一、高壱石二付出米八升壱合

内、壱合苦勞、真赤半分、鹿児島衆中

- 一、高壱石二付出米六升

真赤半分、外城衆中

右之通当年相定候間、諸所御蔵へ可有上納候

〔「歴代制度」巻之六(鹿児島県歴史資料センター黎明館編)『鹿児島

島県史料 薩摩藩法令史料集』一所収)〕

- (32) 松下志朗『鹿児島藩の民衆と生活』(南方新社、二〇〇六年)。

- (33) 松下志朗『鹿児島藩の民衆と生活』一八一頁。

- (34) 物奉行は諸品の差引、諸扶持方・諸職人賃米／飯米の手形を出すことを職掌とし、金銀出納の際には物奉行の手形が必要とされた(『鹿児島県史』第二巻、一一七―一八頁)。

- (35) 「歴代制度」巻之九。それぞれ、宝永六年については同年十月段階、享保十二年については同年九月段階で作成されたものであり、それぞれの年の八月から翌年七月までの一年間について、「賦」＝予算ともいふべきものを示した史料である。

- (36) 「歴代制度」巻之九。

- (37) 真米・赤米・琉米のほかに銭・銀についても記述があるものの、今回は米についてのみ示した。

- (38) 赤米の使途に「階級制」を指摘した松下志郎も、「鹿児島藩にとって、赤米は少なからぬ重要性を有していた」として必ずしも赤米の使途の範囲やその意義を限定しているわけではない(『鹿児島藩の民衆と生活』一八四頁)。

- (39) 「琉球館文書」(琉球大学附属図書館仲原善忠文庫、同文庫デジタル画像データベース「薩琉往復文書集 琉球館文書一」画像五十七を参照した)、弓削政己「奄美諸島の貢租システムと米の島嶼間流通について」(沖縄文化振興会公文書管理部史料編集室編『沖縄県史』各論編第四巻近世、二〇〇五年)。

- (40) なお弓削政己氏は、琉球まで含みこんだ島嶼間相互の米の流通に注目し「薩摩藩による島嶼間の卸米のシステムは、島嶼の平木や砂糖専売制の展開を基礎にして、加えて大坂市場での真米・赤

米値段の違いを認識して確立していったと考えられる」とする
(先掲註(三九)弓削論文二四二頁)。本稿も多くの示唆を得ている。

- (41) 「調所広郷履歴」(『薩摩藩天保改革関係史料』鹿児島県史料刊行委員会、二〇〇〇年)。

- (42) 鹿児島藩の天保改革の詳細については、『鹿児島県史』第二巻ほか原口虎雄『幕末の薩摩 悲劇の改革者、調所笑左衛門』(中央公論社、一九六六年)、芳即正『調所広郷』(吉川弘文館、一九八七年)などに詳しい。

- (43) 以上、松下志朗『近世奄美の支配と社会』(第一書房、一九八三年)に拠った。

- (44) 東京大学史料編纂所蔵、収蔵番号・島津家本さⅡ二二六・四三。「験地」「出来」とあるが、それぞれ「給地」「出来」の翻刻の誤りと思われる。

- (45) 「御高頭并諸上納物取調帳」(東京大学史料編纂所蔵、収蔵番号・島津家本さⅡ二二六・三三)。

- (46) 先掲註(三三)上原論文。

- (47) 大山野とは原野・藪地のことで、入会利用のほか許可によって地味衰微するまで「大山野仕明地」として開発が行われ、地方検者など諸役の見分により見掛十分二上納とされた(『鹿児島県史』第二巻、三二二頁)。

- (48) 菜種子生産と流通については松下志朗「薩摩藩における菜種子の生産と流通」(『福岡大学人文論叢』第三巻一号、一九七一年)に詳しい。

- (49) 久見崎は川内川河口に位置し、藩の軍港が置かれていた。

- (50) 鹿児島県歴史資料センター黎明館編『玉里島津家史料』第三巻、鹿児島県、一九九三年、史料番号八五〇。

- (51) 『斉彬公史料』第一巻、一九一。

- (52) 「諸組御蔵入免本銀并諸上納金本払総」(東京大学史料編纂所蔵、収蔵番号・島津家本さⅡ二二六・五九)。

- (53) 嘉永四年、凶作に伴う米価高騰をうけて申請米四〇〇〇石を米問屋に払い下げている(『斉彬公史料』第一巻、文書番号一九一)。

- (54) 『鹿児島県史』第二巻、四四六頁。

- (55) 『斉彬公史料』第一巻、文書番号一九一。

- (56) 「調所広郷履歴」。

- (57) 米価調節を主目的に設置されるもので、薩摩藩では島津斉彬が設置した。米が豊富に出回った際は高値で買入を行い、逆に欠乏した際は安価で供給したという(『鹿児島県史』第三巻、鹿児島県、一九四一年)。

- (58) 原口泉「島津斉彬の「常平倉」設置について」(『鹿大史学』四二、一九九四年)三頁。

- (59) 先掲註(五八)原口論文。

- (60) 山崎隆三『近世物価史研究』(塙書房、一九八三年)所収第二七表を参照し、「三貨図彙」との相関が強いとされる『株式会社堂島米穀取引所沿革』所収の各年末相場に依った。

- (61) 筑前・肥後・中国・広島。

- (62) 『鹿児島県史』第二巻、三〇三頁。

- (63) 天保四年のみ薩摩米値段が大きく乖離しているが、これは典拠史料の性格によるものと思われ、三井文庫編『近世後期における主要物価の動態』(日本学術振興会、一九五二年)所収相場表に

よると、同年は筑前米一一五匁一分、肥後米一一四匁二分となっており、本史料の示す薩摩米と同じ傾向となっている。

- (64) 高槻泰郎『近世米市場の形成と展開』名古屋大学出版会、二〇一二年、九九一〇〇頁。

- (65) 先掲註(六四) 高槻論文一〇一頁。

- (66) 先掲註(三) 上原論文二一・二三頁。

- (67) 東京大学史料編纂所蔵、収蔵番号…島津家本さⅡ一三二一。

- (68) いずれも外場西目・東目の要港にあたり、江戸御統米・上方諸役人の扶持米を仕登せるなど、同地で年貢米の集積・廻送が行われていた。

- (69) 『斉彬公史料』第一巻、文書番号一九一。

- (70) 例えば「豎山利武公用控」(『斉彬公史料』第四巻、鹿児島県、一九八三年)では斉彬の指示により藩主手廻りの資金として納戸蔵へ金三〇〇〇両を入付ける際、「先達で 御沙汰承知仕候通三千両位は御内用上にて取揚、御徒目付切封にて御納戸蔵へ格護仕置」と述べている(「豎山利武公用控」安政二年六月十三日条)。

- (71) 「調所広郷履歴」。

- (72) 「…改革以来金の払は蔵々滞りなりしか、米は折々滞りたり。改革以前文化・文政中は夏になれば年毎に足らず、士族扶持方より夫賃皆同し」(『薩摩藩天保度以後財政改革顛末書』)とあるように、武士・百姓の別なく広範な米不足が発生していた。

- (73) 田中彰「幕末薩長交易の研究―1―」同「幕末薩長交易の研究―2―」(『史学雑誌』六号三・四、一九六〇年)。

- (74) 藩は米切手を通じた資金調達も行っていたが、大坂では砂糖切手によって盛んな資金調達を行っていた(「商事慣習問目並報答

書案」(大坂市参事会『大坂市史』第五、一九一一年)。また鴻池善右衛門家の「掛合控」などを参照すると、銀主への借銀頼談の際はほとんど必ず翌年の砂糖仕登によって返済を手堅く行うことを述べている。また天保改革の原動力となった新組銀主の結成にあたっても、平野屋五兵衛を砂糖掛屋に任じること为本銀主とする交渉を取りまとめている(「薩州掛合控」二、大阪大学大学院経済学研究科経済史・経営史資料室蔵、文政十年極月五日条)。

(75) 黒田安雄「財政改革期の行政機構―薩摩藩天保改革期の御改革方御内用掛と御趣法方」(西南地域史研究会編『西南地域の史的展開 近世編』思文閣出版、一九八八年)。